
テニスの王子様 -Nobody beats me tennis-

ゼロ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

テニスの王子様 - Nobody beats me tennis
is -

【Nコード】

N5263X

【作者名】

ゼロ

【あらすじ】

テニプリ二次創作小説です 英国帰りの超天才最強テニスプレイヤーであるオリジナル主人公と幼なじみのオリジナルヒロイン達を中心に【漫画版】を中核に【SWEAT&TEARシリーズ】キャラとオリジナルを加え、原作沿い+オリジナル要素!! 完全オリジナルストーリーで展開してます 自己満足二次創作小説の上、超亀更新ですのでご了承下さいませ(・_・) 【オリキャラ&オリジナルストーリーを嫌いな方、原作介入や設定変

更が許せない方は読む事をご遠慮下さいませ】 『なお、ヘタレ

作者のゼロは他に自分のサイトで別の二次創作小説を執筆してます

オリキャラの名前もそのサイトで使っている名前を一部使用してますが、本人が書いてるのでパクリではありません！』 それ

から感想を頂けるとヘタレ作者のやる気もUPするので宜しく御願

いしますm(´▽`)m

プロローグ（前書き）

初投稿作品となります

ヘタレ作者ゼロが超亀更新な上、【テニスの王子様】+【テニスの王子様 SWEAT&TEARSシリーズ】+オリキャラで構成する原作沿いのオリジナルストーリーの自己満足小説になります

自己満足小説ですので、更新催促や小説の批判等にご遠慮下さいませー（・ー・）ー

プロローグ

「ルン・ルン・ルン…」

楽しそうに部屋で掃除機をかけるエプロンを着けた長い髪の少女

「…飽きもせずまた、この部屋の掃除をしてるの？」

その様子を扉の外から見た彼女より少し年上と思われるセミロングの髪の少女が呟く

「？あつ、お姉ちゃん」

少女が掃除機を止める

「この部屋の掃除、何回するつもり？」

…あの子が日本に帰って来てうちに居候するのがそんなに嬉しい？」

呆れた顔をする姉

「え〜と〜／／／」

頬を紅く染めて、左右の人差し指をくつつけて照れる妹

「あの子が海外に行ってから6年、最後に会ったのは幼稚園の卒園式でしょ？」

「6年も経てば幼なじみの私達の事もすっかり忘れてるかもしれないよ？」

「それはそうだけど…」

姉の指摘に妹が困る

「まあ良いわ、それよりもあの娘と待ち合わせして一緒に迎えに行くんじゃないの？」

「へえ…？わあ、もうこんな時かあ〜ん！？」

時計を見て慌てる妹

「私は店の手伝いがあるし、あんた達が行かないと久し振りの日本
であの子、途方に暮れる事になるわよ」

姉の言葉に

「お姉ちゃん、急いで迎えに行つて来るからごめん、掃除の片付け
お願い！」

エプロンを外して妹は姉を拝む

「はいはい、早く行きな」

「うん！」

妹はエプロンを畳みながら慌てて部屋から出て行く

「やれやれ、6年振りの幼なじみとの再会か…あの子、少しはカッ
コ良くなつたかな？」

掃除機を片付けながら姉は呟くのだった

…同じ頃

「確かに記憶だとこの公園を横切るのが近道だった気がする…」

数本のラケットの入った大きなテニスバックを肩に掛けた少年が公園に続く公道を歩いている

「ちゃんと順番を護って下さい！」

そんな中、少女の叫び声が聞こえてくる

「この子達もコートを使う順番を待っていたんです

横入りしないで下さい！」

公園にある自由に使えるテニスコートでテニスウェアを着た女の子と恐怖に震える小さな子供達を複数の男達が囲んでいる

「五月蠅、お前達みたいな下手クソが使うより、俺達みたいな上級者がこのコートを使った方が価値があるんだよ！」

「「そうだ・そうだ、とつとと諦める！」」

どうやら体格の大きな男達がコートを占拠しようとしているらしい

「ちよつとアンタ達、何を子供達を苛めてるのよ！」

そこに大きなリュックを背負った髪の長い小柄な少女が登場し、怒鳴る

「何だデメエは？」

「誰だって良いでしょ！」

子供達でさえ順番を守ってるんだから大きいアンタ達も順番守りなさいよ！」

男達を睨む小柄な少女

「良いぜ、条件次第では譲ってやる」

男達のリーダー格の男がそう言つと

「条件？」

小柄な少女が呟く

「そのの姉ちゃん和小娘が俺達と大人の遊びに付き合ってくれたらコートは譲ってやる」

リーダー格の男はウェアを着た少女の手首を掴む

「嫌、離して！」

ウェアの少女が抵抗する

「このお！」

小柄な少女がそれを救出しようと駆け寄るが

「よつと！」

男達3人に捕まり押さえつけられる

「離しなさいってばあ！」

暴れる小柄な少女だが、男3人の力の前に抵抗虚しく動けない

「大丈夫、痛いのは最初だけですぐに気持ち良…？痛てえ！？」

リーダー格の頭に凄いスピードで飛んで着たテニスボールが命中する

「全く、こつこつ輩はどここの国でも居るんだ

…嫌がってるんだから離して貰えません？」

テニスラケットを片手に先程の少年が現れる

「このボールを俺様にぶつけたのはテメエか？」

少女から手を離し、ぶつけられたボールを拾い握り締めながら怒りの表情をあらわにするリーダー格の男

「そつだと言ったら？」

「ただで済むと思うな！」

取り巻きの男達が少年を囲む

「…貴方達、立派なウェア着てラケット持つてるんならテニス出来るんでしょ？」

「だったら、俺と勝負しませんか？」

「勝負だと？」

「貴方達が勝つたら好きになよ、その代わりに俺が勝つたら大人しく居なくなるって事でどうです？」

「良いだろう、俺様が勝つたら女達は俺達とお楽しみ、貴様はそのバックと有り金全部頂くぜ！」

少年の提案にのるリーダー格の男

「勝てたならね、その女の子、悪いけどバック預かって」

「うっ、うっ」

解放された小柄な少女にバックを預ける少年

「それでそのウェアの人」

少年がウェアを着た少女を指差す

「私？」

「審判を頼む…鼻屑無く、真剣にね」

少年はウェアの少女に頼むとラケットを持ってコートに立つ

「ボコボコにしてやる！」

リーダー格の男もまた反対側のコートに立つ

「サーブは貴方からで良いですよ」

「後悔するなよ！」

リーダー格の男は少年を舐めきったまま、ラインに立つ

…だがその後、彼等は反対にこの少年との勝負を受けた事を後悔する事になる

「ぜえぜえ…ばっ、馬鹿な俺様が全く歯が立たないとは…」

相当テニスの腕前に自信があつたらしいリーダー格の男は両手両膝をコートに着いて息を切らしている

…結果は少年が1ポイントも取られる事無く、ストレート勝ちであった

「嘘だろ、全国クラスと言われた腕前の山田さんがこんなクソガキに…」

回りの取り巻き達も呆気に取られている

「俺の勝ちですけどまだやります?」

ラケットを肩に担いだ少年がリーダー格の男、山田の前で尋ねる

「あつ、当たり前だ！」

テメエがサウスポーだから偶々タイミングが狂っただけだあ！」

フラフラになりながらもラケットを杖に立ち上がるうとする山田

「止めときな、貴様程度の実力じゃソイツには勝てねえぜ

なあ、樺地？」

「うす

そこに現れたのは氷帝学園中等部のテニス部のレギュラージャージを着た2人組の少年

「？樺地くんと跡部部长！？」

ウェアを着た少女が名前を叫ぶ

「？あ、跡部だとお！？

あの全中関東大会2位の氷帝の帝王 跡部景吾かあ！」

山田が驚く

「鳥取、状況は大体把握してる

…まだ、やるってなら今度は俺様達が相手になってやる」

跡部が男達を睨む

「かつ、勝てる訳がない！」

「につ、逃げろおー」

跡部に恐れをなして逃げる男達

「ふん、所詮はその程度の輩だな

「おい、お前！」

跡部が少年を呼ぶ

「何か？」

「うちの部員が世話になった

それから俺様の眼力「インサイト」によるとお前は本気じゃないよ、
利き腕と反対でプレイした…違うか？」

跡部の指摘に

「凄いた、見抜かれたのは久し振りです」

少年は感心しながらラケットを右手に持ち替える

「俺様のインサイトを舐めるなよ」

「貴方となら凄いテニスが出来るかも知れないですね」

少年が微笑む

「面白い奴だ、俺様は氷帝学園中等部、テニス部部长の3年の跡部景吾だ。」

「こっちにいるのも同じく2年の樺地宗弘だ」

「うっす」

頷く樺地

「さっきは助けてくれてありがとうね」

私は同じく氷帝学園女子テニス部の2年の鳥取ナヲミ、貴方の名前
は？」

ウェアの少女…鳥取ナヲミが名前を尋ねる

「桜内」「さくらい」「優」「ゆづいち」です」

少年…桜内優一が答える

【ピッピッ…】

「？いけない!？」

ポケットから腕時計を取り出して時間を見た優一が慌てて小柄な少女からバックを受け取り、ラケットを仕舞う

「そんなに慌ててどうしたの？」

小柄な少女が尋ねる

「待ち合わせしてた時間なんだ!」

優一はバックを背負う

「それじゃ、また!」

少年は一礼すると駆け出し行く

「ちょっと待ってよ！」

小柄な少女も下ろしていた鞆を背負い追いかけて消える

「桜内優一…面白い奴だ、覚えておいてやるぜ」

「うっす」

跡部の言葉に同調する樺地

「桜内優一くんかあゝ…／＼／」

ナヲミは頬を紅く染めて、優一と小柄な少女が駆けていった方角を
みたまま呟くのだった

プロローグ（後書き）

まずはオリジナル主人公の登場回でした

他のオリキャラや原作&ゲームキャラも順次登場します

宜しければ是非、感想を宜しく御願いますm()m

第1話 青春学園中等部（前書き）

早めに執筆出来たので、投稿します

第1話 青春学園中等部

「それで、君はいつまで付いて来るんだ？」

数分後、商店街を歩く優一は公園から大きなリュックを背負って自分の後ろを付いて来る少女に振り返り尋ねる

「仕方無いでしょ」

私も今日、奈良から出て来たばかりで道が分からないだし！

…それから君って呼ぶのは止めてよ

私には赤月「あかつき」「巴」ともえ「っていう可愛い名前があるんだから！」

小柄な少女は頬を膨らませて抗議する

「それで赤月は何処に行くつもりなんだ？」

「巴で良いよ、私も優一って呼び捨てにするから、ちなみに此処」

巴はポケットから地図を出すと優一に見せる

「…随分とざつくばらんに書かれた地図だけど、行き先にあるこの寺を人に聞けば分かるんじゃないのか？」

「そうしようと思ったたらさっきの騒ぎに巻き込まれた」

運が悪いみたいに言う巴

「それは御愁傷様」

「そこで、さっき優一は待ち合わせしてるって言ったでしょ？」

「確かに言ったけど…」

答える優一

「待ち合わせの人はズバリ地元の人でしょ？」

「ああ」

巴の質問に頷く優一

「だったらその待ち合わせしてる人にこの地図見せて案内して貰えば確実じゃない」

「へえ、良く考えたな」

感心する優一

「それで、待ち合わせ場所は？」

「彼処、翠屋って洋菓子屋兼喫茶店」

優一が指差す先に喫茶店翠屋があった

【カランカラン…】

「いらっしゃいませえ〜」

店に入った優一と巴に若い中高生くらいの店員が近づけて来る

「すみません、人と待ち合わせしてるんですが…」

「ん？」

…もしかして優？」

メイド服っぽい服を着た優一より歳上と思われる少女が尋ねる

「その呼び方は…もしかして、月姉？」

「そっ月音」「つきね」「よ、久し振りじゃない」

優一を抱き締める月音と名乗った少女

「久し振り月姉」

月音から離れながら挨拶する優一

「英国帰りで彼女連れとは、やるじゃない！」

優一のオデコを軽く小突く月音

「コイツは赤月巴って言って訳あってさっき知り合った迷子なんだ」

「? 誰が迷子よ?」

優一に迷子と呼ばれて怒鳴る巴

「はいはい、店内ではお静かに！」

…あれ、ひかりと琥珀「こはく」ちゃんは一緒じゃないの?」

「ひかりと琥珀には会って無いけど…」

月音の質問に優一が頭を左右に振る

「ひかりってば、琥珀ちゃんと一緒にわざわざ駅まで優を迎えに行っただけど…あちゃ〜入れ違いになっちゃったか」

バツの悪い顔をする月音

「それじゃ、俺が駅まで戻って迎えに行くよ

月姉は悪いけど、コイツを頼む」

【カランカラン…】

優一はそのまま店を出て行く

「さて、ひかり達の事は優に任せて巴ちゃんだけ何処に行きたいの？」

「はい、此処なんですけど…」

月音に地図を渡す巴だった

「琥珀、優くんに会うの久し振りだねえ」

「ひかり、今日それ言うの何回目か分かってる？」

駅前で嬉しそうな表情で話すひかりと呼ばれた女の子は腰まで伸びた亜麻色の長い髪まで伸ばし、青茶の綺麗な瞳が特長で美少女で可愛いという言葉が似合い

琥珀と呼ばれた小柄な少女はハーフなのかブルーがかかったシルバー色のショートカットの髪と金色の瞳が特有で美少女という言葉が相応しい女の子である

…1つだけ確かなのは先程から彼女達の横を通る男性達が振り返る程の美少女である事は間違い無い

「それにしても優一さん、遅いですね」

「うん、心配だね」

駅の改札口から出て行く同い年くらいの少年を目で捜すが見つからない

「…困った、久し振り過ぎてひかり達の顔が分からない」

其処に駅に戻って着た優一が到着する

「優 くん？」

「ん？」

「…俺をこの呼び方をするのは？」

ひかりに呼ばれ振り返る優一

「…やっぱりい、優くんなんだあ！」

【バサッ】

瞳から涙を溢しながらひかりは周りも気にせず優一に抱き着く

「久し振りだなひかり

…それと、もしかしてお前、琥珀か？」

優一が荷物をその場に置き、ひかりの頭を撫でつつ、呆然としてる琥珀に声をかける

「すっ すみません、人間、嬉しすぎるとどうやら何をして良いか解らなくなる様です」

言いたい事等、沢山あったはずなのだが普段は冷静な彼女も優一の右腕の袖を掴んだまま嬉しさの余り瞳が潤んでいる

「取り敢えずはただいまかな？」

… ひかり・琥珀

優一が笑顔で言うと

「優くん、お帰り」

「お帰りなさい、優一さん」

少女達もまた飛びつきりの笑顔で答えるのだった

数日後…青春学園中等部・校庭

「え〜つと、クラスは…」

優一・ひかり・琥珀の3人が貼り出されたクラス表で自分のクラスを探す

… 日本に帰って着てから数日、まだ多少は時差ボケが残っていたりす

る優一

「? あっー、優一!？」

そんな中、1人の少女が優一を見つけて指差す

「ん？」

…おっ、迷子の巴じゃん!」

「誰が迷子だあ!」

優一の言葉にツッコミを入れる巴

「優一さん、知り合いですか?」

何も知らない琥珀が尋ねる

…優一達が再び店に戻った時、巴は月音に連れられて入れ違いで目的地の寺に出発していたのであの日以来会って居なかつたりする

「迷子って、もしかしてお姉ちゃんが言ってた娘？」

ひかりが月音から聞いた話を思い出す

「それじゃ、貴方達が優一と入れ違いで駅に迎えに行っちゃった？
人なんだ」

納得する巴

「赤月、クラス確認したの？」

そこに背が高いとは言えないぶっきらぼうな少年がやって来る

「あつ、リョーマくん！」

巴が少年をリョーマと呼ぶ

「そこにいる奴らは赤月の友達？」

素っ気なく聞いてくるリョーマ

「うん…って、そういえばちゃんと自己紹介してなかったね

私は赤月巴、こっちにいるのは越前リョーマくん

私が出宿させて貰ってる家の息子さん」

「…どひも」

巴の紹介にかつたるそうに答えるリョーマ

「私は白河「しらかわ」ひかり、こっちにいるのが有栖川「ありすがわ」琥珀ちゃん、隣にるのが桜内優一くん

…私達3人は幼なじみなの」

ひかりが代表して自己紹介をする

「ねえ桜内だっけ？」

…お前、テニスやるの?」

優一を見たりヨーマが即座に聞いてくる

「そついう越前もテニスやるんだろ?」

…左利きでしかも結構強い」

優一がリヨーマに語る

「そついうアンタも中々だね

…この学校で退屈する事はなさそつだ」

リヨーマはそつ言つと校舎に向けて歩き出す

「ちよつとリヨーマくん、待ってよ!」

それじゃまたねえ」

巴もその後を追い掛けて行く

「優一さん、あの越前リョーマって人…強いんですか？」

琥珀が尋ねてくる

「間違い無く強いと思うよ」

《青春学園中等部テニス部、父さんに薦められて入ったけど、退屈はしないみたいだな》

リョーマの後ろ姿を見て呟く優一

…数分後、掲示板で発見したクラス表で5人は同じクラスだった事が発覚するのであった

第1話 青春学園中等部（後書き）

更新スピードは此処から急激に堕ちます（笑）

感想よろしくお願いします

第2話 女の子達の入部（前書き）

まさかのお気に入り登録が4件もありました！

まだプロローグと第1話しか投稿してなかったのに、4人もの人が登録してくれるとは嬉しく思います

この場にて御礼申し上げますー（・ー・）ー

それでは第2話どうぞ

第2話 女の子達の入部

【チュンチュン…】

「くう〜・すう〜…」

外で雀が鳴いている中、ベッドで眠っているのは白河家で居候中の優一

【トントン…ガチャ】

「優くん、起きてる？」

制服姿のひかりが入って来る

「くう〜・すう〜…」

全く起きる気配の無い優一

「優くん、起きて！」

早く起きないと朝御飯食べる時間が無くなっちゃっよ」「

ひかりが布団越しに優一を揺さぶり起こす

「うっ…うん、もう朝？」

上半身を起こし、右手の甲で目尻を擦りながら起き上がる優一

「もう7時になるよ」

「ふわぁ〜 分かった、着替えて下に降りて行くわ」

背伸びしながら返事をする優一

「うん、待ってるねえ」

ひかりは頷くと部屋を出て行った

「おはようございます」

数分後、身仕度を終えて制服に着替えた優一がキッチンに入って来る

「おはよう、優一くん」

もう学校には慣れた？」

椅子に座る優一に食事中の髪の毛の長い、ひかりと月音の2人に似た母親
親 白河琴音が尋ねる

…白河家はひかり・月音の父親が他界していて、母子家庭で母親の
琴音が大黒柱として喫茶店【翠屋】をコック兼ねて経営しているの
で、家事全般はひかりと月音が手伝っている

「はい、お陰様で」

頷く優一

「お待たせ、優くん」

制服の上からエプロンをしたひかりがトレイに優一の分の朝食を載せて運んで来る

「ありがとう、ひかり」

早速、朝食のトーストに手をつける優一

「そつだ優

アンタ、テニス部に入部するんでしょ？」

目の前の椅子に座る制服姿の月音が尋ねてくる

「その予定だけど…」

頷く優一

「ひかりと琥珀ちゃんは女子テニス部に入るの？」

母親が質問すると

「うっん、悩んでる

琥珀も女子テニス部のレベルが高く無いからお姉ちゃんみたいにテニススクールだけにしようかって言った」

既に食事を終えていたのか、優一の隣の椅子に座り紅茶を飲んでいたひかりが答える

「うちの女子テニス部は男子に比べるとレベル高く無いからねえ」

月音が咳く

「優くんはテニススクールはどうするの？」

「練習時間が足りない時は、父さんの知り合って人が経営してる希望ヶ丘TCに行くつもり」

いつの間にか食事を終えてる優一

「それじゃ、私達と一緒にのテニススクールだね。」

嬉しそうな顔をするひかり

【ピンポン】

「あっ、琥珀だ」

ひかりが椅子から立ち上がり、エプロンを外す

「それじゃ、行くところか」

「了解」

月音に続き、優一も席を立つ

「行ってらっしゃい、片付けは母さんがせつとくからお願いわね」

ニコニコしながら見送る母親

「行ってきまあす」「

3人は鞆とバックを持つとキッチンから出て行った

「おはようございます」

優一達を見て挨拶する琥珀

…家を出ると高級車リムジンの前に制服姿の琥珀と黒いスーツ姿の初老の男性が立っている

「おはよう、琥珀

それから瀬場さんもおはようございます」

ひかりが2人に挨拶する

「おはようございます、ひかり様・月音様・優一様」

瀬場と呼ばれた初老の紳士が挨拶する

「「おはようございます」

優一と月音も挨拶を返す

「瀬場さん、そろそろ戻って」

「畏まりました」

瀬場はリムジンに乗り込むとその場から去る

「朝からリムジンとは流石は有栖川コーポレーションの令嬢だな」

4人で学校に向かい歩いている最中に優一が呟くと

「私は歩きで行くと言ってるんですが、お祖父様達を送り迎えして

貰えって五月蠅って…」

困った表情を見せる琥珀

【有栖川コーポレーション】

跡部財閥に勝るとも劣らない世界的な超一流企業で有栖川コーポレーションの会長の孫が琥珀だったりする

…特に琥珀は唯一の孫娘な為、祖父母や両親に愛情を注がれていた

【チャリン・チャリン…】

「よう、白河！」

自転車でやって来た少年が月音の隣に並ぶ

「…五月蠅のが来た」

片手で額を抑える月音

「月音先輩の知り合いですか？」

初めてみる相手の事を尋ねる琥珀

「私の去年と今年のクラスメイトで、テニス部の一応レギュラーの
桃城武、通称バカ桃」

「誰がバカ桃だ！」

そこの3人の内、1人は確か白河の妹だよな？

残りの2人も新入生か？」

「はい、改めてまして桃城先輩

妹のひかりです」

「1年の有栖川琥珀と申します」

「…桜内優一って言います」

3人がそれぞれ挨拶する

「ちょっと待った、俺の事は親しみを込めて桃ちゃんと呼んでくれ
！」

歩く4人にペースを併せて器用に自転車を漕ぎながら語る桃城

「分かりました、桃ちゃん先輩」

ひかりが返事をする

「それで桜内だっけ、お前、今日の仮入部からテニス部に入るのか
？」

優一の背負うテニスバックを見て聞く桃城

「はい、一応その予定です」

素直に答える優一

「そいつは楽しみだな、楽しみだぜ」

《竜崎の婆さんが今年の1年坊主に2人、期待の新人が入るって楽しみにしてたっけ》

1人納得する桃城

「おっはあゝ、ツキリン」

月音に後ろから抱き着く学生服の少年

「英二先輩、止めてください」

強引に離そうとする月音

「良いじゃん、良いじゃん、ツキリンと俺の仲じゃん」

全く離れ様としない英二と呼ばれた先輩

「英二、白河さんが困ってるだろ？」

もう1人現れた少年が黒いオーラを放ちながら目を見開いて英二の肩に手を置く

「？ひっ!？」

…分かったよ不二」

それにビビり、英二は月音から離れる

「おはようございます、不二先輩・英二先輩」

桃城が2人に挨拶する

「おはよう桃

それにひかりちゃん、入学おめでとう」

普段の表情になった不二と呼ばれた少年はひかりに御祝いを告げる

「ありがとうございます、不二さんじゃない、不二先輩」

ひかりが不二にお礼を告げる

「ひかりも知り合いなのか？」

「うん、不二先輩は家族でうちのお店の常連さんなの」

優一の質問に答えるひかり

「姉さんに裕太、僕も翠屋は好きだからね」

「ちよい待ち、俺も翠屋の常連の1人だにゃん！」

不二に負けぬ様に英一と呼ばれた少年が何故か猫語で語る

「確か英二先輩も常連さんではあるけどね」

月音が認める

「それより、そっちの2人は？」

不二が優一と琥珀の事を尋ねる

「私達の幼なじみの桜内優一と有栖川琥珀」

月音が紹介する

「「宜しく御願いします」「」

優一と琥珀が挨拶する

「うん、僕は3年の不二周助

こっちは同じく3年の菊丸英二」

「よつろしくう〜」

不二に紹介されて菊丸はウィンクしながらVサインをする

「不二先輩・英二先輩、優はテニス部入る予定なのでよろしくお願
いしますね」

「ツキリンの頼みだし、任せてよ」

月音が頼むと菊丸が胸を張る

「桜内だっけ、君かなり強いみたいだね」

「そういう不二先輩も…」

不二先輩はカウンター・パンチャー、菊丸先輩はサーブ&ボレーで
桃城じゃない桃先輩はアグレッシブ・ベースランナーってスタイル
ですよ？」

「へえ〜僕らを見ただけで…凄いね」

「失礼します」

昼休みに職員室に呼ばれたひかりと琥珀

「おう、こっちはこっち」

1人の老教師が手招きして呼び寄せる

∴その側には月音と巴にもう1人のポニーテールの女の子が立っている

「？ひかりちゃんと琥珀ちゃん!？」

巴が驚く

「お姉ちゃん、こちらの先生は？」

「朝話した、男子テニス部の顧問の竜崎先生」

妹の質問に答える姉

「今、白河姉に紹介された様に私が男子テニス部顧問の竜崎だ

さてアンタ達を呼んだ理由だが…」

「申し訳ありませんが女子テニス部への勧誘ならお断りします」

竜崎先生の言葉の最中に琥珀がはつきりと意見を述べる

「まあまあ話は最後まで聞いておくれ

今までは男子の大会はシングル3試合とダブルス2試合だったが、今年から試験的にミクスド2試合が追加された事は知っているかい？」

「いえ、初耳です」

竜崎の言葉にひかりが首を左右に振る

「残念ながらうちの女子テニス部の実力は男子に比べて低い、このまま大会に出ても最初からミクスド2試合分のビハインドを負う事

になる」

「大会を勝ち上がる以上、致命的な弱点になりますね」

ひかりが呟く

「そこでだ、才能ある女子に入って貰ってミクスドを強化しようと思ってるね

籍は女子テニス部に置く事になるが、実際は練習や試合は男子と一緒じゃって貰う事になるがどうかね？」

竜崎先生の提案する

「その前にそういう誘い方をするとという事は私達のテニスの実力を知ってるんですか？」

琥珀が質問する

「ちゃんとチェックしとった

去年の全国女子テニススクール大会小学生の部、シングルス戦とダブルスの優勝者の白河ひかりとそのダブルスパートナーの有栖川琥珀特にダブルスは3年連続で大会3連覇してる」

竜崎先生がニヤツとする

「…詳しい」

驚いた表情の巴

「白河姉は去年の女子テニススクール大会中学生の部シングルス部門の優勝者

これだけの逸材がいれば、ミクスドでうちが苦戦する事は無いと思っ
ってね」

笑みを魅せる竜崎先生

「それじゃ巴…じゃない、赤月さんとそっちの娘も経験者？」

ひかりが尋ねる

「いや、小鷹「こたか」は経験者だが、赤月は私の教え子の娘なんだが、テニス経験は無い」

「だが、本人がテニス部に入るつもりなのでミクスドの選手として入部して貰う事になった」

竜崎先生の説明に

「本当？」

「うん、私の将来の夢がお父さんと同じスポーツドクター兼トレーナーだから、最初はマネージャーやるつもりだったんだけど、竜崎先生がその為にもスポーツの経験があった方が良いつて勧められたから……」

琥珀の問いに頷く巴

「小鷹・小鷹：あつ、もしかしてあの小鷹那美「なみ」さん！」

ひかりがポニーテールの少女を見て叫ぶ

「確かに私は小鷹那美だけ…」

頷くポニーテールの少女 小鷹那美

「2年前のスクール大会の関東予選の準決勝で私と闘ったの覚えてない？」

「2年前の大会？」

…？あつ！？」

ひかりに言われ、何かを思い出した那美

「ひかりをフルセットまで追い込んだあの小鷹さん」

琥珀も那美を思い出したらしい

…なお、この大会の優勝者は準決勝で琥珀、決勝で妹を倒した6年生だった月音だったりする

「去年の大会で再戦出来るの楽しみにしてたのに、大会自体に参加してなかったみたいだから心配してたんだよ」

「…ごめん」

再会を嬉しそうに語るひかりとは対象的に表情が曇る那美

「さて、白河姉・白河妹・有栖川

お前達はテニス部に入部するか検討してくれるかい？

ただし、無理強いは出来な…」

「入部します！」

竜崎先生の言葉を遮る様に返事をするひかり

「おや、そんなに簡単に決めてしまっただけかい？」

不思議そんな表情をする竜崎先生

「はい、男子テニス部のレベルが高いのは姉から伺ってますし

ミクスドに興味有りますから」

《公式戦で優くんと同じコートに立てるチャンスだもん》

あっさり頷くひかり

「私も入部します」

「仕方無い、妹と幼なじみが入部するなら私も入るしかないか」

琥珀と月音も入部を決める

「よし、それじゃこの入部届けを記入して放課後の練習から参加しておくれ」

「すみません、テニス道具持って着てないので、家に取りに戻って
からでも良いですか？」

竜崎先生に琥珀が小さく手を挙げ言う

「私達もです」

月音・ひかり・那美も手を小さく挙げる

「仕方無いね、それじゃあテニス道具を持って着たら許可はとつて
おくから女子テニス部の部室で着替えて男子テニス部のコートに着
ておくれ」

「はい!」「」

元気良く返事をする4人

…こうしてひかり・琥珀・月音はテニス部に入部する事になった

第2話 女の子達の入部（後書き）

読んで頂きありがとうございます！

出来ましたら感想を頂けると有難いです

よろしく願います m (——) m

第3話 英国帰りの少年と米国帰りの少年（前書き）

無茶して連日連続投稿です（笑）

またお気に入り登録が増えました

登録してくださった方、ありがとうございますー（・ー・）（・ー）

それでは第3話をどうぞ

第3話 英国帰りの少年と米国帰りの少年

「はあ」

《まさかテニス部にも馬鹿がいるとは…》

優一が目の前の光景に溜め息を吐く

…クラスメートの越前リョーマと部室で着替えた優一と一緒にテニスコートに着たところ、ちよつと前に知り合つた3バカトリオ 自称テニス歴2年の堀尾・カチロー・カツオが2年生のテニス部員の池田雅也・林大介にインチキ缶倒しゲームでカモられていた

「おい、その1年

サーブ缶倒しにお前達も参加しろ！」

池田が優一とリョーマを新しいカモと思い、参加を強制してきたのだ

「仕方無い

先輩、1つ提案があるんだけど…」

顔を真つ青にしてる3バカトリオを見て優一が言う

「何だ、…何を言っても挑戦料とボール代は貰うぜ！」

悪徳商人化してる池田

「俺がもし缶を倒せなかったら賭け金を2倍払いますよ

その代わりに、俺が缶を倒したらその3人の賭け金を含むこの馬鹿げたゲーム自体をなかった事にしてくれませんか？」

優一の提案に

「…良いぜ、その代わりお前が缶を倒せなかった場合はその3人の賭け金の支払いも2倍だぜ！」

「了解」

池田の提案もあっさり受ける優一

「オイオイ、何を勝手に約束してるんだよ!」

泣きそうな表情の堀尾

「ねえ、大丈夫？」

缶の中には…」

リョーマが優一に話かける

「気づいてる、石が詰まってるだろ」

サーブラインに向かいながら優一が答える

「ほら、ボールだ!」

林がテニスボールを優一に投げて寄越す

「どうも、それじゃ行きますか」

ボールを右手でトスすると、飛んだ優一は左手のラケットで缶に向けて打ち込む

【ガコーン】

ボールはそのまま真っ直ぐに缶を直撃して中に入ってた石をバラ撒きながら跳ねて地面に転げ落ちる

「？嘘だろ！？」

「？馬鹿な！？」

啞然としている池田・林

「？あつー！？」

缶の中に石が詰まっていたのか！」

よづやくカラクリに気づく堀尾

「やるじゃん」

ニヤリツとするリョーマ

「約束通り、無かった事にして貰いますよ先輩方？」

ラケットを肩に担ぎながら語る優一

「?うつ、五月蠅、今は無しだ!!」

優一を睨む池田

「か弱い新入生をカモつちや」

いけねえくなあ、いけねえーよ」

そこにやって来たのは朝、会った桃城武である

「…桃城」

林が呟く

「コイツは約束を守ったんだぜ

先輩のお前が約束破っちゃ駄目だろ

それに賭けゲームが部長に知れたらどうなるかは分かってるだろ?」

「…」

「……………」

桃城の一言に池田・林が黙り込む

「桜内、行くっ」

「ああ」

リョーマに言われ優一が行こうとするが

「よう、誰が帰って良いって言ったよ？」

桃城がラケットの先端を優一とリョーマに向ける

「きゃ〜桜乃と巴、居た・居たわ」

「どいどいっ？」

「私はテニスコートの場合に案内を頼んだだけなのに…」

そこに制服姿の女子2人と運動着に着替えた巴がやって来る

「ほら、あの白い帽子を被ってる人とその隣でラケットを左手で持つてる人！」

髪を左右に分けて結んでいる少女がリョーマと優一を指差す

「?リョ、リョーマくん!?!」

「?ゆっ、優一!?!」

桜乃と呼ばれた長い髪を三つ編みにした少女と巴が叫ぶ

「成る程、かなりやるみたいじゃないか桜内優一

そしてそっちのお前が噂の越前リョーマか

…出る杭は早めに打つとかねえとな!」

ニヤリツとする桃城

「桜内の知り合い？」

「朝会ったばかりの2年生のテニス部レギュラーの桃城武先輩

…通称、【桃ちゃん】だそうだ」

リョーマの問いに答える優一だった

「？桜内・越前、マジで2年のレギュラーと試合すんかよ!？」

試合の準備をしている優一とリョーマに話かける堀尾

…突如、桃城と試合をする事になった優一とリョーマ

「桜乃と巴、知り合いなの？」

フェンス越しに見学してる少女が桜乃と巴に話かける

「うっ、うん」

まあ、リヨーマくんは……」

桜乃が頷く

「2人供、良く知ってる

リヨーマくんは私が下宿してるお家の息子さんで、優一はこの街で初めて出来た友達だもん」

巴が答えると

「何々、アンタは私のリヨーマ様と二つ屋根の下で暮らしてるよ、私の優一様の事は呼び捨てにしてる訳？」

少女が怖い表情で巴に詰め寄る

…しかも優一とリョーマを私物化している

「朋香ちゃん、怖いよ

呼び捨ては私も名前で呼ばれてるし…」

巴が一步後退するが

「私より先にお互いに名前で呼びあつ中…益々許せなあくいいい？」

「ギブギブ！」

朋香と呼んだ少女から嫉妬のチョークスリーパーをかけられた巴が彼女の腕を叩きタツプする

「先にやらせて貰うよ、桜内」

「ぶっぞ」

優一が順番を譲りリョーマが先にコートに立つ

「おい、ちょっと待ってって桃！」

反対側のコートに入ろうとする桃城を止める池田

「だって、お前…ぶぐう」

「まあ〜良いじゃねえの」

お前らが1年からカモってたのは内緒にしててやっからよ！」

何か言おうとした林の口を塞ぎ、桃城はコートに立つ

「婆さんから聞いたんだけど、お前、ツイストサーブ打てるんだっ

て？」

桃城がりヨーマに尋ねる

「？そーなんつすか！？」

驚く堀尾

…その後にツイストサーブを知らない1年&2年生達にツイストサーブの説明をする堀尾

「……………」

《へえ》 越前もツイストサーブ打てるのか》

フェンスに寄りかかり感心してる優一

…その後、堀尾が審判をかって出て試合が開始される

挑発を受けたリョーマが最初は出し惜しみしたツイストサーブを打つと桃城も持ち前のパワーで強引に返す

だが、テクニックを魅せるリョーマに対して焦りの表情を浮かべる
桃城

「…まだまだだね」

「ちよつとタンマ！」

止めた、もう良いや」

最後はリョーマが左手にラケットを持ち替えた時点で桃城がギブアップをする

「「？え〜っ!?!」」

優一以外のその場にいたメンバーが不満の声を上げる

「？おい桃、突然どうしたんだ!?!」

池田が声を荒げる

「この辺で勘弁しといてやるよ

…それにもう1人いるしな」

桃城が優一を見る

「…桃先輩、止めといた方が良いですよ」

優一がそう言つと

「おいおい、今の試合を見て畏れを成したか？」

挑発する桃城

「寧ろ万全の状態の桃先輩となら試合しますけど、右足を庇いながらじゃ、全力は出せないでしょ？」

隠してはいたが桃城が右足の怪我を庇っていた事を指摘する優一

「何だ、気づいてたのか」

バツの悪い表情をする桃城

「それに…」

優一はゆっくりとリョーマのいるコートの子バレーラインに立つと左手のラケットで誰も居ないサーブを打つ

【シュルシュル…パン】

リョーマとは逆回転のツイストサーブを打ち、そのボールはフェンスにめり込みながらも回転を続けている

「…ツイストサーブ」

驚いた表情の桃城

「俺、実力は越前に負けてるつもりは無いですよ

…どうせやるんならベストの状態でやりませんか？」

笑みを魅せる優一

「はいはい、この勝負は桃の負けだよ」

…「白河」

先に着替え終わったのか、月音が1人で歩いて来る

「足の怪我を庇いながらじゃ、優や越前くんには絶対に勝てないよ

…寧ろベスト状態の桃でも勝てないかもね」

月音が言いつつ

「どついつ意味だ?？」

ちよつと不機嫌になる桃城

「優と越前くんがラケットを持ってる手つて言えば分かる？」

…それに優は私より強いつて言つても？」

「!？」

月音の発言に驚く桃城

「?オイオイ嘘だろ!？」

「?あの白河さんより強いのかよ!？」

驚く池田と林

「あのおゝ先輩方、あの美人の先輩が言つた事はどついつ事ですか？」

堀尾が尋ねる

「彼女は2年の白河月音

去年の合宿に顧問の竜崎先生の頼みで彼女も特別に参加してたんだが、手塚部長以外のレギュラーと試合して全員に勝ってるんだよ」

「しかも彼女は全国女子テニススクール大会の中学生の部シングルス部門の優勝だ！」

池田と林が真っ青になりながら呟く

「…って事は、？もしかして日本一強い女子中学生えー!？」

堀尾が声を荒げる

…カチロー&カツオも驚いている

「あくまでテニススクール大会の優勝者ってだけで、日本一って訳

じゃないけどね

…それで桃、どうするの？」

日本一を否定しつつ、桃城に問いかける

「わあ〜ったよ、やるならベストの時にするよ

…そして勝たせて貰うぜ桜内！」

《忘れてたぜ、越前は左利きで桜内は右利きだって事をさ》

優一に宣戦布告する桃城

「楽しみにしています」

笑顔を魅せ優一はコートを出る

「ねえ、桜内」

「ん？」

「コートを出たところでリヨーマに話かけられる優一

「お前、やっぱり強いんだね

…試合しない？」

リヨーマがラケットを肩に担ぐ

「…また今度な」

「あっさりとかわす優一

「逃げるの？」

「もしかして自信無いの？」

「今度はリヨーマが挑発するが

「部活初日の今日は挨拶だけとは言え、これ以上騒ぎを起こす気が無いだけだ

…どうせやるんならお互いに利き腕で遠慮無く試合がしたいからさ

簡単に理由を述べる優一

…リョーマが自分と同じ、利き腕と反対でプレイしてた事に気づいていた優一

「ちえっ、だったら近いうちに試合しようよ」

「分かった」

後日のリョーマとの試合を了解する優一

「初めてまして、桜乃と巴の親友の小坂田朋香でえゝす」

そこへ朋香が巴と桜乃を連れてやって来る

「赤月の親友ねえ」

さくの…って誰？」

リョーマが呟く

「？ガーン！？」

ショックでその場に塞ぎ込む桜乃

「巴、女子テニス部に入ったのか？」

1人だけ運動着姿の巴に優一が尋ねる

「違うよ、これは…」

巴が説明しようとした時

「半分正解で半分外れです

女子テニス部に籍だけ置いて…」

「私達はミクスドの選手として男子テニス部と一緒に練習する事になったの」

琥珀とひかりが那美と一緒にやって来る

「？しっ、白河さんとあつ、有栖川さん!？」

「「? ……//」

優一達の側にいた堀尾が顔が真っ赤になりながら叫び力チロー&力ツオも顔を真っ赤にする

「桜内、ちよつと来い」

優一を引っ張ってちよつと離れる堀尾

「お前、美人の白河先輩と学年で1・2を争う美少女2人とどんな

関係なんだ！」

ひそひそ声で尋ねる堀尾

「…3人供、俺の幼なじみ

少なくとも、白河の苗字で月姉とひかりが姉妹なのは分かるだろ？」

恋愛感情に超が付く程、鈍感な優一は素直に答える

「しかもお前、赤月と下の名前で呼びあってるだろ！」

尚も続く堀尾の尋問

「知るか、巴からお互いに呼び捨てにしよっつて言われたからそっつしてただけだ」

《…かったるい》

面倒臭そうに答える優一

「んで、白河

お前のその格好は女子テニス部にでも入部したのか？」

コートでは桃城が月音に尋ねている

「今年の大会から男子の大会はミクスドが試験的にプラスされたで
しょ？」

…それに伴い、竜崎先生が私達を入部させたの」

月音が説明する

「…って事は今年1年はクラスも部活も白河と一緒に訳だ」

「…不本意ながらね」

嬉しそうな表情をする桃城とは対象的に嫌そうな顔をする月音だっ
た

第3話 英国帰りの少年と米国帰りの少年（後書き）

ちよつと人の意見を聞いてみたいこの頃です

読者様が感想を書いているのを気長に待つ、ヘタレ作者ゼロなのでした（T・T）

第4話 校内ランキング戦（前書き）

【テニスの王子様 - Nobody beats me tennis】の投稿を始めてからまだ1週間も経って無いのに気に入る登録数が25人以上とハタレ作者もビックリ（ ;）！！

登録して下さいましてありがとうございます（・|・）

そして初感想を頂けたので、奮起して3日間連続投稿します

それでは第4話どうぞ！

第4話 校内ランキング戦

「やっぱねえ〜可笑しいと思ったんだよ

あの桃城って先輩、右足を捻挫で痛めてて、実力の半分も出てなかったらしいぜ」

「「……………」」

翌日、部活時間前だが仮入部の1年が黙って球拾いしてる最中に優一とリョーマに何故か自慢気に話す堀尾

「おい桜内・越前、聞いてるのか？」

返事が無い事にイラつく堀尾

「全然……」

「怪我については俺が昨日、言ってる？」

面倒臭そうに返答するリョーマと優一

「まあ〜ねえ、1年のお前達がレギュラーと互角のはずないよなあ〜」

やっぱり、青学はレベル高え〜よ

お前達、知ってるか？

毎月1回、部内のランキング戦

毎回レギュラーの座を賭けて試合するんだぜ

この辺に青学の強さの秘密が…」

堀尾がウンチクを長々と1年の前で話す

「いるよね、ウンチクばっか凄い奴」

呆れた表情のリョーマ

「目の前にな

…俺は向こうに行くわ」

自分の近辺の球拾いが終わった優一が別の場所に移動する

「優くん、お疲れ」

優一が移動した先にひかりと琥珀がやって来る

「こっち側の球拾いは私とひかりだけで充分ですよ」

琥珀がそう言つと

「あれから逃げて着ただけだ」

優一が派手なウェアを着た堀尾を遠巻きに指差す

「ああ、堀尾の馬鹿ですね」

それだけで事態を理解した琥珀

「堀尾くん、自慢話が長いもんねえ」

ひかりも困った表情をする

…なお、この場に居ないレギュラー陣＋月音は部室で会議中

「おい、桃城と試合した凄い1年ってお前か？」

優一と入れ替わる様に2年の荒井将史が目の前にいるリョーマに尋ねる

【ブンブン…】

首を左右に振り、ある人物を指差す

「アイツか

…確かに生意気に女とジャレて目立ってやがる！」

怒りに震えながら荒井はその人物の元に向かう

「おい、帽子の1年に聞いたが、てめえか！

桃城みたいな怪我人と互角の試合をしたからって調子こいて女とイチャついてんじゃねえよ、1年！」

荒井がやって着たのは優一の前

「誰もイチャついて無いし、球拾いしてるだけですよ」

《越前め、面倒臭そうな事になりそうだから俺に押し付けたな》

ラケットの上に並べてある複数のテニスボールを見せる優一の目線の先には惚けた顔をしてるリョーマが移る

「五月蠅、まだレギュラー陣が出てくるまでまだ時間もある

貴様、コートに入れ

試合型式でこの荒井様が直々、身体に教えてやるぜ！」

持っていたテニスラケットの先端を優一に向ける荒井

「…かつたるいな」

拾った球を全てカゴに入れると、荒井の後に続きコートに入る

「1セットマッチだ、コートはこっちでサーブも貰うぜ！」

トスをせず、一方的に自分に有利なコートとサーブ権利を奪う荒井

「?何で桜内くんが試合する事になってるの!?!」

巴と一緒に球拾いしてた那美が戻って着て驚いた顔をする

「どっかの誰かさんがあの先輩を優一さんにけしかけたんです」

「……………」

横目で睨む琥珀を知らん顔で通すリョーマ

「しかも下級生相手にトス無しでサーブ権利とコートの両方を奪うなんて酷いよ!」

現在、テニスの基本ルール勉強中の巴が理不尽な行動の荒井を怒る

「大丈夫だよ、巴ちゃん」

「ひかりちゃん？」

ひかりが巴を宥める

「優くんはこの程度の事じゃ、絶対に負けたりしないからね」

優一を信じきってるという瞳をしているひかり

「行くぞ1年坊主！」

荒井は優一目掛けてサーブを放つ

「……………」

《面倒だし、かったるいからあれやるか》

着た球を左手のラケットで打ち返す優一

…暫くラリーが続く

「へえ〜」

そのラリーを見ていたリヨーマが何かに気づく

「流石は優一さんですね」

琥珀も気づき眩く

「どっぴいっ事？」

那美が尋ねる

「優くんを良く見れば分かるよ」

ニッコリして答えるひかり

「ハア・ハア……」

《どうなってるんだ

1年坊の全球が俺が拾えるギリギリのところまで返してきやがる

…しかもあのガキ、全然、息が切れてねえ！》

汗まみれで全力で走らされ、息を切らしながらボールを必死に打ち返す荒井

…しかし、そのボールは全て優一の居る場所に打ち返されてく

「ねえ」 気のせいかな？

優一、試合始まってから一步も動いて無い気がする

：しかも荒井先輩に打ち返す球が全部拾えるか拾えないかのギリギリラインじゃない？」

巴が気づいた事を呟く

「正解です

優一さんは右足を軸にあの場所から一步たりとも動かず、ボールの回転を自在に操って自分のいる場所に打ち返させる

荒井先輩には全ての打球が優一さんに吸い寄せられてる感じがして
ると思いますよ」

隣にいた琥珀が説明する

「しかも、手加減してやってるから質が悪い」

《桜内の奴、親父と同じ事を出来てやがる》

リヨーマが付け加える

「トッププロでも使える人が少ない【領域「ゾーン」】」

ひかりが呟く

【バタン】

数分間とはいえ、ハイペースのラリーで疲れが限界を迎えた荒井が足が纏れて転び、それを他所に優一は普通にスマッシュを決める

「ぜえぜえ… たっ、 たった1球で…」

「先輩、大丈夫ですか？」

大の字に寝転ぶ荒井に汗1つかかず余裕の表情の優一がネット越し

に尋ねる

「くっ、くっそっタレ！」

《化物め！》

たった1球だが、数分間全力でコート内を走らされた荒井には次のサーブを打つ気力すら奪われていた

「まだやるって言うなら相手はしますよ？」

…やるならまた全力疾走して貰う事になりますけど」

「…俺の敗けだ」

余裕綽々の表情の優一を見て渋々自分の負けを認める荒井

「あれ、何で荒井がコートで大の字になってんの？」

「どうやら桜内を相手に試合をして逆にやられたってところじゃない?」

他のレギュラー陣と一緒にやって来た菊丸と不二

「ちっ、1年に負けてんじゃねえよ、2年の面汚しが…」

バンドナを頭に巻いた目付きの鋭い海堂薫が呟く

「荒井相手に楽勝とは…」

データ収集をやり直す必要が有るな」

長身のメガネをかけた乾貞治が呟く

「強いな、あの1年」

「確かに白河さんと先生が薦める事だけある。」

スポーツヘアーの河村隆とヘルメットみたいな髪型の大石秀一郎が語る

「どうです手塚部長？」

優、なかなかやるでしょ？」

「ああ

…ただし、彼処にいる全員、騒ぎを起こした事により、グラウンド10周だ」

月音の隣のとても中学生とは思えない部長と呼ばれたメガネをかけた手塚国光が告げるのだった

「これより、ランキング戦を行う」

数日後の土曜日、集まったテニス部員の前で部長の手塚がが校内ランキング戦開始を宣言する

【校内ランキング戦】

本来は毎月2・3年全員を4ブロックに分けてリーグ戦を行い、各ブロックの上位2名の計8名がレギュラーとしての各種大会への切符を手にする戦いである

「今年の大会から試験的にミクスド1・2が設定された為、レギュラーの枠が増える事になった

それに伴い、今回の校内ランキング戦はいつもと違い、特別に5ブロックに分けて行う

A～Dブロックはいつも通り男子のみ、Eブロックはミクスドの女子選手のみで行う」

説明する大石

「男子はミクスドの件もあり、上位2名以外にも今回のみ活躍した2名を竜崎先生と部長推薦としてレギュラーとする」

男子テニス部部长 手塚国光が言葉を続ける

「レギュラー枠が増えた以上、チャンスを掴める様に頑張ってくれ
！」

それでは組み合わせを発表する」

大石が組み合わせ表を貼り出す

…2・3年生のレギュラーを除く部員達は組み合わせを見て一喜一憂する

「Eブロックはお姉ちゃん・琥珀・那美ちゃん、私だね」

「今回のミクスド女子のレギュラー枠は4名、そのままレギュラー
決まりでもありますね」

組み合わせ表を見ていたひかりと琥珀

「やっぱり、私だけ選ばれなかったか」

「まだテニス始めて間もない基礎段階だし、仕方無いんじゃないかな？」

残念そうな顔の巴を励ます那美

「男子は1年では優がBブロック、越前くんがDブロックに入ったか」

月音が男子の組み合わせを見て呟く

主な各ブロックのメンバー

Aブロック 手塚国光・大石秀一郎

Bブロック 菊丸英二・桃城武・桜内優一

Cブロック 不二周助・河村隆

Dブロック 乾貞治・海棠薫・越前リョーマ

Eブロック 白河月音・白河ひかり・有栖川琥珀・小鷹那美

そして校内ランキング戦がここに始まるのだった

第4話 校内ランキング戦（後書き）

次回はよいよ校内ランキング戦試合編に入る予定かも？ 何故か疑問系（笑）

評価も順調なので、将来的には他のテニプリ二次創作小説の作者様と特別コラボしたりしてみたいと思います

…ちなみに頑張り過ぎてそろそろ更新が予定の超亀になりそうです
（；；ー；）

取り敢えず頑張れる範囲で更新を続けたいと思います

引き続き感想をお待ちしますので宜しく御願いますm（――）

m

第5話 ランチタイム(前書き)

まさかまさかのお気に入り登録50件突破!

正直、ヘタレ作者はビックリしてます) (;) !!

登録して下さった方、ありがとうございます! (;) (;)

それでは第5話どうぞ!

第5話 ランチタイム

「Bブロック桜内、6 - 0です」

優一がコート前で簡易机&椅子とホワイトボードで作られた受付の担当をしている大石に告げる

…校内ランキング戦は試合の勝利者が受付に試合結果を報告するシステムになっていた

ちなみにレギュラー陣が順調に勝ってる中、優一とリョーマも対レギュラー陣を残し、順調に勝利を上げていた

「了解、強いな桜内」

此処までの3試合を全て0「ラブ」ゲームで勝利している優一に感心する大石

「Eブロックは月姉が2連勝か」

優一が呟く

…月音是那美戦を6 - 0、琥珀戦を6 - 3で勝っている

「流石は白河さんってところだ

白河さん相手に有栖川も3ゲームを取ったのは凄いけどな」

大石が笑みを溢す

「今はひかりと琥珀の試合の最中ですよね？」

優一が聞く

…ひかりは最初的那美戦を6 - 1で勝利している

「噂をすれば、どうやら終わった様だ」

こちらにやって来た少女を見て大石が言う

「Eブロック白河、7・5です」

ちょっと疲れた表情のひかりが報告する

「琥珀を抑えたのか」

「うん、何とかね」

…やっぱり琥珀も那美ちゃんも強かったよ」

優一に告げるひかり

「6・1で勝った小鷹戦もかい？」

結果記入した大石も不思議そうに尋ねる

「結果以上に粘られ危ない場面も多かったです

那美ちゃんが怪我でテニス辞めてた1年間のブランクが無かったら

と思うと怖い相手です」

那美を評価しているひかり

「勝ったみたいだね」

そこに現れたのはリョーマである

「そつちもだろ？」

「当然」

Dブロック越前、6 - 0」

優一に答えながらリョーマは結果報告をする

「越前も3連勝か」

…「りゃ、うかうかしてられないな」

苦笑みを浮かべる大石

「副部长、飯食べて良いっすか？」

「ああ、構わないぞ

午後の試合は1時30分から再開だからそれまでにはコートに戻れ
「よ

リヨーマの問いに大石が答える

「私達も行こうか？」

「…そうだな」

ひかりの言葉に頷く優くん

「あれ桜内、白河と食べんの？」

リョーマが不思議そうに尋ねる

「正解に言つとひかりと月姉に琥珀とな

…弁当を作ったのがひかりで纏めて人数分作つたらしいから一緒に行かないと飯抜きになる」

優一が理由を説明する

「もし良かったら越前くんも一緒にどう？」

…巴ちゃんも一緒だしどうかな？」

「悪いけどパス

堀尾達と一緒に喰う約束したから…んじゃ、また後で」

ひかりの誘いを遠慮したりリョーマは手を軽く挙げて去って行く

「それじゃあ優くん、行こう」

「了解」

優一とひかりも歩き出す

「……………」

《残念、俺は誘って貰えなかったか》

誘って貰えなかった事を残念に思う副部長の大石秀一郎だった

「やっと着たあゝ」

待ち兼ねた様に叫ぶ巴

…コートから離れた芝生の上にシーンを引いてお弁当の鼓を置いた
周りに月音・琥珀・巴が座っている

「あれ、那美ちゃんは？」

「那美ちゃんは遠慮するって……」

ひかりの質問に巴が答える

「……………」

《私とひかりに負けたのが余程、悔しかったんだね

きつと午後の琥珀ちゃん戦に向けて密かに練習してるのかもね》

月音が那美の事を案じる

「琥珀、その重箱がお前の弁当か？」

何人前食べる気だ？」

琥珀の前にある正月のおせち料理が入ってるかの様な五段重の重箱を見て言う優一

「意地悪言わないでください

私が大食いじゃないのは優一さんも知ってるでしょ？

瀬場さんが用意してくれたんですが、皆さんと一緒に食べると言ったのを勘違いして皆さんで食べると思っただけです」

困った表情をしながら琥珀は重箱を一段ずつ並べていく

…重箱の中身は山の幸や海の幸に肉料理・魚料理に、デザートまで驚く程の豪華食材を使ったお弁当であった

「うわあ〜凄いご馳走!」

嬉しそうな表情の巴

「ひかりのお弁当と琥珀ちゃんのお弁当を併せると此処にいる5人じゃ食べきれないわね」

月音が困った表情をする

「言われると私も自分のお弁当もあるし」

同じく困った表情をする巴

「食べられるだけ食べて残りは持って帰るしかないですね」

「確かに…」

勿体無い気はするけどね」

琥珀の意見に頷くひかり

「お腹空いたんだけど…」

優一が告げる

「そうだね、それじゃ食べ様か」

「そうですね、私のお弁当も良かったら食べて下さい」

ひかりと琥珀が言う

「それじゃ、遠慮無く！」

重箱に入ってた大きな海老を口に入れる巴

…それから暫く、5人が会話を交えて食事をしていると

「おっ、うまそうなもんが喰ってるじゃねえかあ！」

「本当だあー、良いなあ〜」

「英二、桃

失礼だよ」

そこに着たのは桃城・菊丸・不二である

「3人揃ってどうしたんですか？」

琥珀が尋ねる

「英二と昼食を取ろうと思って場所を探してたんだけど、そこで桃に会って一緒になって歩いてたら白河さん達に会ったって訳

…お昼、一緒に良いかな？」

「はい、どうぞ」

不二の頼みに頷くひかり

「なあなあ、これ喰って良いか？」

桃城がひかりと琥珀の弁当を食べたそんな表情をしている

「はい、どうぞ」

「どうぞせ、私達だけでは食べきれませんし」

ひかりと琥珀が頷く

「よっしゃ、遠慮無く頂くぜ！」

「俺も俺も！」

桃城と菊丸が弁当に手をだそうとする

「ちょっとバカ桃、アンタ自分のお弁当は？」

「試合前にもう喰ったに決まってるんだろ！」

月音に自慢気に言う桃城

「威張るなバカ桃！」

「仕方ねえくだろ、喰っちまったもんわよ！」

睨む合う月音と桃城

「はいはい、そこまで

…桃も白河さんを怒らせるとご飯を分けて貰えず皆が食事をすること
ころを指を加えて見守る事になるんじゃないかな？」

「ぐう」

不二に言われて桃城が黙る

「ひかり・琥珀ちゃん、そう言う訳だからバカ桃にはお弁当を分け
なくて良いから」

笑顔で語る月音

「うわぁ〜桃、こんなに美味しいのに食べれないなんて可愛いそうお
」

パクパクと片手にひかりのサンドイッチ、もう片手で骨付き唐揚げ
を食べている

「不二先輩も何か食べますか？」

辛いのが好きならスパイシーチキンサンドお勧めですよ」

「それじゃ、そのスパイシーチキンサンドとエビチリを貰おうかな」

琥珀に聞かれて不二がリクエストする

「どうぞ」

「ありがとう」

紙皿に載せてサンドイッチとエビチリをひかりが不二に渡す

「桃ちゃん先輩、早く謝まらなないと食べられ無くなりますよ」

「うっ…白河、俺が悪かった」

巴に言われ泣々謝る桃城

「お姉ちゃん、もう良いんじゃない?」

「…しょうがない、ひかりに免じて食べて良いわよ桃」

妹に言われ姉が承諾する

「エヘ」

「よっしゃ、喰っぜえ!」

琥珀から受け取った割り箸を持つと早速食べ始める

「ああー桃、それは俺が狙ってた肉団子だぞ！」

「桃ちゃん先輩、落ち着いて食べてくださいよ」

桃城の喰いっぷりに叫ぶ英一と呆れる巴

「ご馳走様」

食事を終えた優一が立ち上がる

「あれ優くん、もう良いの？」

ひかりが聞いてくる

「もうお腹一杯だ」

…少し散歩してくる

靴を履くと優一は離れるのだった

「……………」

《腹ごなしに少し壁打ちでもするかな》

部室に置いてたラケットを小脇に抱えて壁打ちの出来るコートの上
に向かう優一

【パソコン・パソコン…】

誰かが先に壁打ちをしているらしい

「秘密特訓か？」

優一が汗まみれになって壁打ちをしていた少女に話かける

「…桜内くん」

壁打ちを止めて振り返った少女の正体は那美である

「ほら、その様子だと休憩時間に飲み食いせずに続けてるんだろ」

「ありがとう」

優一が持っていたスポーツドリンクのペットボトルを投げて渡すと那美が受け取る

「ひかりと月姉に負けたのが悔しかったのか？」

「うん…私のテニス2人に全く通じなかった」

優一の問いに壁に寄り掛かる様に座り、スポーツドリンクに口をつけてから答える那美

「だからと言って壁打ちして琥珀に勝てるとは思って無いんだろ？」

「うん、ひかりちゃんと琥珀ちゃんの試合を見て悔しいけど、2人と今の私じゃレベルが違うから勝目が無いのは分かってる」

素直に頷く那美

「それでも何者せずには要られなかった」

「…その通りだよ」

優一の指摘に素直に頷く那美

「テニスが好きなんだな」

「えっ…」

優一の言葉に驚いた表情をする那美

「テニスが好きだから負けたくないんだろ？」

「…うん」

頷く那美

「井の中の蛙：自分が未熟な事を知ってるんだ

なら、小鷹はきつとこれから強くなるよ」

「私が？」

優一の言葉に不思議な表情をする那美

「兎に角、昼飯食べて少し休んだ方が良い

今、無茶をする必要は無いし休む事も大事だぞ」

優一の意見に

「…そうだね

無茶しても急にテニスは上手にならないもんね」

頷く那美

「大丈夫、小鷹ならきつと強くなるさ」

優一が笑みを魅せる

【ドキッ】

「……………//」

那美の顔が真っ赤に染まる

「大丈夫か小鷹、顔が真っ赤だぞ？」

心配する超鈍感少年

「ううん、何でも無い大丈夫……//」

《どうしたんだろ私、桜内くんがカツコ良く見える

…顔がまともに見られないよぉ〜》

反対側を向いて顔を見られない様にする那美

「本当に大丈夫か？」

「うん、それじゃまた後で… / / /」

那美はラケットを握るとその場から凄い勢いで走り去る

「？」

残された優一は暫く那美が何故走り去ったか理由が解らず不思議そうな表情をしていたが、すぐに切り換えて壁打ちを開始するのだった

第5話 ランチタイム（後書き）

超鈍感主人公、フラッグを立てるも気づかず（笑）

なお、主人公は成績優秀・スポーツ万能・容姿端麗の設定でございます

次回こそはレギュラー戦を書きたいと思えます

第6話 ダンクスマッシュ（前書き）

初めてテニスの試合部分を書いたので正直、不安一杯の投稿です（笑）

もしかすると後々、書き直しするかもしれない

それでは第6話どうぞ

第6話 ダンクスマッシュ

「思ったより早く、あの日の決着がつけられるな」

ネットを挟み、反対側コートで嬉しそうに語る桃城

…昼休みを終えて校内ランキング戦が再開され、遂に優一と桃城の試合となっていた

「右足は大丈夫ですか？」

プレイを見ている限り、庇ってる気がするんですが…」

優一が気になった事を指摘する

「治ったって言ったろ

それより、どっち？」

桃城がラケットを反対側にして地面に着けて回転させる

「表「スムーズ」」

優一が告げると

【カラン】

「残念、裏「ラフ」だ！

サーブ権は貰うぜ」

桃城がサーブ権利を取る

「コートはこっちを貰います」

優一が所定の位置に向かう

「ザ・ベスト・オブ・1セットマッチ、桃城サービスプレイ！」

審判の部員が宣言する

「まずは小手始めだ！」

トスを上げて優一のコートに向けてサーブを放つ桃城

「……………」

優一はそれを右ストレートを打ち返す

「甘いぜー！」

すぐに反応した桃城は左クロスで打ち返し、ネットに詰め寄る

「後ろがお留守ですよ」

優一は桃城の後ろのコートに落とす様にロブを上げる

「貰ったぜー！」

桃城は飛び上がり、強烈なジャンピングスマッシュを優一のコート

に叩きつけポイントを奪う

「15・0」

審判がコールする

「出たあ、桃の十八番 ダンクスマッシュ！」

試合見学してる生徒が呟く

「どうだ、これが俺のダンクスマッシュだ！」

ラケットを優一に向けてニヤリツとする桃城

「桃先輩、足は完治したみたいですね」

安心した様な表情の優一

「そういう事だ、だから俺には右で挑んで来いよ」

優一に利き腕を使う様に挑発する桃城

「考えておきます」

優一がラケットを構える

「なる、生意気だ！」

ラインに戻り、サーブを打つ桃城

「どうやら桃、足の方はもう大丈夫みたいだね」

「なんだあゝ、今回は間に合わないと思ったのになあゝ」

試合の合間に優一と桃城の試合を見学してる不二と菊丸

「丁度、優の試合に間に合った」

そこにやって来たのは月音である

「白河さん、試合は終わったの？」

「まだ、今やってる琥珀ちゃんVS那美ちゃん戦が長引いてて……」

不二の質問に答える月音

「おじや」

【ミ下】

再びダンスマッシュを決める桃城

「40-0」

「どーん」

優一を挑発する桃城

「こりゃ、桃が有利だにゃん」

菊丸が呟く

「…優ってば、わざと桃にダンスマッシュを打たせたな」

呆れた表情をする月音

「どづいつ事だい？」

「見てれば分かりますよ」

不二の問いに笑みで答える月音

「いい加減に右を使ったらどうだ？」

「言ったでしょ、考えておきますって」

桃城の言葉にも動じない優一

「生意気だ！」

カ一杯、サーブを打つ桃城

「……………」

桃城の足元付近を狙いストレートを放つと今度は優一がネットに詰
め寄る

「甘い、よっ」と

桃城が優一の身長では届かない位置にロブを上げるが

【ドン】

次の瞬間、桃城のコートに優一の放った一撃が決まる

「おいおい、冗談だろ？」

信じられないものを見た様な表情の桃城

「…これは驚いたね」

思わず表情が変わる不二

「?今、桜内が放ったのって桃のダンクスマッシュ!」

驚いた表情の菊丸

…そう、優一は桃城のダンクスマッシュを鏡に写ったかの様に左腕で全く同じフォームで見事に真似して決めたのだ

「これが優の怖いところ、その1

1度見た相手の技を自分のものにしてしまっんです

月音が呟く

「審判の先輩、コールは?」

「:15-40」

優一に催促されて慌ててコールする審判

…驚き過ぎてボールを忘れてた

「さて桃先輩、続けますよ」

優一が再びラケットを構える

「やっぱり生意気！」

桃城が再びサーブを放つ

「……………」

着た球を右ストレートで打ち返し、再びネットに寄る優一

「……………」

《今のダンクスマッシュがマグレかどうか試してやる》

再びロブを上げる桃城

「行きます」

優一は高く飛び上がるが、今度は先程とは違いフォーム似てはいるが桃城以上のボディバランスとタイミングで飛び、今まで以上の破壊力とパワーを持つダンクスマッシュを打ちコートに決める

「なんだ、そりゃ」

全く反応出来ず動けなかった桃城

「今のが優の怖いところ、その2

自分のものにした相手の技を更に進化させて瞬時にそれ以上の技にしてみせるんです」

「成る程、自分の必殺技を見ただけで覚えられて、それ以上の技にされた当人はきついね」

月音の意見に頷く不二

「30 - 40」

審判がコールをする

「ダンクスマッシュ改ってところです

…桃先輩、ダンクスマッシュの御礼です

ギアを上げます」

優一がラケットを左手から右手に持ち替える

「そう、こなくっちゃな！」

再びサーブを放つ桃城

「左に打ちますよ」

優一が予告した方にストレートを打ち返すが桃城は追いつく事が出来ない

「40 - 40」

審判のコールが響く

「やる」

《今までと動くスピードが全く違うじゃねえか!》

内心焦りが出る桃城

「おっ、桜内の動きが変わった!」

「利き腕で右で打つ事は左以上のコントロールとスピードボールが打てる

更にテニスの基本、相手が打つと同時に軽く上に飛んで両方の爪先で着地するスプリットステップ

半歩早くボールに反応出来、筋力の収縮の反動を利用してダッシュに繋げるステップでスタートが半歩早くなれば、1m先のボールに届く

桜内はそのスプリットステップを片足で行い、飛んでる一瞬の間で相手の次の動きを読んで判断している

だから半歩どころか一步半動きが早い分、選択肢と行動範囲が広くなる」

菊丸の意見に不二が解説する

「優の怖いところ、その3

ギアを上げると全く別人の様に強くなる」

《それでも今の優はまだ全然本気じゃない》

月音が呟く

「ゲームセット、ゲームオンバイ桜内優一6-0」

審判がゲームセットを宣言する

…数十分後、優一はその後、桃城にポイントを取られる事なく勝利した

「全く、お前はどれだけ力を隠してるんだ？」

「秘密です」

ネット越しに握手を交わす桃城と優一

「だけど、次は負けねえからなあ！」

「楽しみにしてます」

桃城のリベンジ宣言にも笑顔で答える優一だった

「強いね、彼

まだ底を魅せてない」

不二が呟く

「英二先輩、大丈夫ですか？」

次の優の相手でしょ」

ちよつと意地悪く尋ねる月音

「ふっふふん、大丈夫ぶい

桜内には悪いけど俺のアクロバティックでやっつけちやる」

持っていたラケットをクルクル手首と腕を使い回す菊丸だった

第6話 ダンクスマッシュ（後書き）

次はVS菊丸英二戦の予定です

お気に入り登録が60件を突破しました

登録してくださってる読者様、ありがとうございますー！（・）（・）

第7話 アクロバティックテニス（前書き）

いつの間にかお気に入り登録件数が70を突破！

しかも感想も頂けて作者として嬉しいです

感想を頂けた読者様とお気に入り登録してくださった方、この場にて御礼申し上げます！（・|・）

それでは第7話どうぞ！

第7話 アクロバティックテニス

「これでえ！」

対戦相手で姉、白河月音のコートにライジングショットで打ち返す妹のひかり

…Eブロック最後の試合、全勝同士の姉妹対決も遂に終盤となっていた

「流石はひかり、厳しいところを攻めてくるね…でも！」

月音はラケットを構えると

「ムーンスライダー！」

月音の必殺技の一つ、打ったボールが三日月の様に急激に曲がる高速スライスボールがコートに決まる

「ゲームセット、ゲームウォンバイ白河月音、6・4」

審判をしていた琥珀が宣言する

「ありがとうございます」

…やっぱりお姉ちゃんは強いね」

ネットで姉と握手するひかり

「そういつひかりも随分と強くなったよ

ライジンググショットやドロップショットのタイミングは解りずらくて苦労したわよ」

妹を褒める月音

「カツコイイ〜月音先輩」

《私も月音先輩みたいになりたい!》

月音のプレイスタイルに憧れる巴

「うん、月音先輩は強いね」

《こんな間近に強い人がいるんだもん

私は月音先輩を目標に強くなる》

3戦全敗だったものの最終戦の琥珀との試合を6 - 4と追い込んだ
那美は月音を自らの目標とする

「さて、この後私は試合の結果報告をして他の試合を見てくるけど、
ひかり達はどっするの？」

ラケットをバックに片付けながら尋ねる月音

「優くんの試合を見学しに行ってくる」

「同じくです、さっきは試合で見られなかったので……」

ひかりと琥珀はすぐに答える

「私達も一緒に行ってきます」

「うん、桜内くんの試合は気になるし」

巴の意見に頷く那美

「桃に勝ってみたいだからレギュラーは確定してると思っけどね

…それじゃ私は行くから、また後でね」

月音はバックを背負うとコートから出て行った

「私達も行こうか」

「了解です」

ひかりと琥珀がバックをしょいながら歩き出す

「レッシンゴー！」

「ちょっと、巴ちゃん待ってよ」

先に行こうとする巴の後を那美がバックを手に慌てて追いかけるのだった

「残念無念、また来週！」

菊丸は得意のネットプレーでアクロバティックプレイを見せてボレーを決める

「やりますね、菊丸先輩」

優一が相手を褒める

「ゲーム4 - 3、菊丸リード」

審判の部員がコールする

「…優くんがリードされてる」

Bブロックのコートに着たひかりが驚く

「桜内の奴、英二先輩のアクロバティックプレーに振り回されっぱなしだぜ」

「もっとも桜内は左のみでプレーしてるけどね」

見学していた桃城とリョーマが隣にやって来る

「菊丸先輩は見る限り、凄いスピードで左右に動いてるよ」

「優一はそのスピードについて行けてない」

那美と巴が意見を言う

「長袖長ズボンジャージって事はまだ、優一さんはあれを外して無いですね」

琥珀がひかりの隣で呟く

「流石は菊丸先輩です」

「…だけど、もう弱点を見つけました」

優一がサーブラインに立つ

「ほへえ、んじゃその弱点とやらを教えて貰おうかな？」

菊丸がラケットを構える

「弱点その1、これです！」

優一はラケットを右手に握る替えると菊丸目掛けてサーブを放つ

「ただのサーブ…？うおっと！？」

自分の顔面に目掛けて飛んで着たツイストサーブを慌てて避ける

「15-0」

審判がコールする

「ネットプレイをさせなければ良い」

ニヤリッとする優一

「にゃろ」

ぶすつとした顔をする菊丸

「行きますよ」

再び右でツイストサーブを放つ優一

「甘い、何度も同じ手は通用しないよおくん」

ツイストサーブが飛んでくる方角に飛ぶと両手打ちで見事に打ち返し、ネットに向けてダッシュする菊丸

「これが弱点その2です」

サーブ後にスプリットステップで先にネットに詰めていた優一は鮮やかなジャンピングボレーショットを決める

「30-0」

「嘘おくん、アクロバテックプレえ〜」

審判のコールする中、自分の十八番を優一にやられて動揺する菊丸

「おいおい俺のダunksマッシュの次は英二先輩のアクロバテックプレえをコピーかよ」

目を丸くする桃城

「気がつきました？」

優一さんの今のツイストサーブ、わざと菊丸先輩が打ち返せるレベルで打ってます」

「うん、優くんが利き腕で放つ本来のツイストサーブの威力はあんなものじゃないもの」

琥珀の意見に頷くひかり

「ふうん、桜内のツイストサーブはもっと凄いんだ

…試合したら面白そうだね」

リョーマの関心が優一に向く

「まさかアクロバティックプレーをやられるとは思ってなかったぞお」

頬を膨らませる菊丸

「確かに菊丸先輩は左右の動きには滅法強いですけど、シングルスで同じプレイスタイルの選手と試合する場合は余裕が無いです

そして、弱点その3」

再び左手にラケットを持ち替えるとスライスサーブを放つ優一

「甘あ〜い」

打ち返すとすぐにネット越しに駆け寄ろうとする菊丸

「……………」

優一は黙ったまま打ち返し菊丸も右に左に飛び、アクロバティックプレーをしてボールを打ち返しラリーが続く

「はあ・はあ・はあ……」

《何で打つ球打つ球、全部が桜内に吸い寄せられてるみたいだ》

息を切らしながらアクロバティックプレーで打ち返す菊丸

優一は荒井戦の時と同じゾーンを使い、軸足を動かさず事なく着た球

に複雑な回転をかけて打ち返していた

…後に部長である手塚国光が使って手塚ゾーンと呼ばれるゾーンの使い方と全く同じものであった

「菊丸先輩、息が切れ集中力が切れかけてますよ」

「しまっ！」

優一が放ったスマッシュに追いつけないで決められる菊丸

「40-0」

「菊丸先輩の1番の弱点で、長期戦になった時に対応出来るスタミナが無い」

優一が菊丸の弱点を指摘する

「そうか、だから今までわざと4・3まで粘ったんだ」

「うん、菊丸先輩は汗まみれなのに桜内くんは殆ど汗をかいて無い」

巴と那美が気づく

「はあ・はあ…」

《まさか、大石や乾に言われた弱点を桜内に指摘されるとは…》

息を整える菊丸

「悪いですが、菊丸先輩

これ以上ポイントを与える気はありませんから！」

優一が放った高速サーブが菊丸の股下を通り抜ける

「ゲーム桜内、4 - 4」

審判がコール

…その後、体力を使い果たした菊丸には優一の攻撃を凌ぐ事が出来ず

「ゲームセット、ゲームウォンバイ桜内優一、6 - 4」

優一が最後のジャンピングスマッシュを決めて勝利を手にした

「ありがとうございました」

「くそおゝ見事に作戦に引っかかったぞ」

挨拶する優一に不満気一杯の表情の菊丸

「でも、菊丸先輩のスタミナが倍以上あったら勝てたのは先輩かも
知れないです」

優一がそう言つと

「にやろ、ぜえ〜つたあ〜いに弱点を克服して次は勝つてやるから
なあ!」

「楽しみにしですよ菊丸先輩」

握手を交わす菊丸と優一

「…まだまだだね」

リョーマは呟くとその場を離れる

「よっしゃ、桜内に負けずに続けて英二先輩を撃破してやる」

気合いを入れ直す桃城

「那美ちゃん、次はリョーマくんの試合を見に行かない？」

「うん、良いよ」

巴に誘われてリョーマの後を追う那美だった

「桜内、6 - 4です」

ひかり、琥珀を引き連れ試合中の大石に代わり、受付にいる月音に報告する優一

「はいはい、6 - 4って事は英二先輩に勝ったんだ」

月音は結果記入をしながら呟く

「ある意味、凄い試合でした」

琥珀が冷静に語る

「それでやっぱり今日の校内ランキング戦は最後までそのまま試合したの？」

「いえ、利き腕は使いましたよ？」

月音に右手をグーパーして見せる優一

「違うよ優くん、お姉ちゃんが言ってるのは腕と足の重り、パワーリストとパワーアングルの事だよ」

ひかりが教える

「ああ〜これの事ですか？」

優一がジャージの袖を捲るとリストバンド型のパワーリストが出てくる

「うち「有栖川コーポレーション」特性のリストバンド&アンクルリスト

特殊合金を重りとしてる為、見た目以上に重く1つが5Kgもあるのに、それを4つも着けて試合するなんて…」

呆れた表情をする琥珀

…優一は20Kgの重りをつけたまま試合をしていたのだ

「これを外すのは公式戦で本当の強者と闘う時のみって決めたからさ」

サラッと語る優一だった

初めての校内ランキング戦でレギュラーの菊丸・桃城を破り全勝で終えた優一と同じくレギュラーの乾・海堂を倒したりリョーマはレギュラーの座を獲得したのだった

第7話 アクロバティックテニス（後書き）

感想頂けたので頑張って2日連続投稿してみました（笑）

流石に次回更新は遅くなると思いますのでご了承くださいませー（笑）
ー）

第8話 休日(1) (前書き)

やっと完成しました

完全オリジナルの祝日編を書いてみました(笑)

楽しんで頂けると幸いです

それでは第8話どうぞ！

第8話 休日(1)

校内ランキング戦が終わった翌日の日曜

【ピンポン・ピンポン…】

白河家の呼び鈴を鳴らす人物が居た

「どちら様？」

留守番をしていた優一はキッチンにあるインターフォンのモニターカメラで相手を確認する

「優一、私だよ！」

モニターに映っていたのは赤月巴、その人である

【ガチャ】

「わざわざ、どうしたんだよ？」

月姉とひかりなら喫茶店に手伝いに行ってるぞ」

優一はキッチンから玄関に向かい、扉を開くと巴に語る

「違うよ、今日は優一にお願いがあって着たんだよ」

「俺に？」

巴の言葉に不思議そうな表情をする優一

「私にテニスを教えて！」

「は？いい？」

次に巴が告げた言葉は完全に予想外だった優一

「リョーマくんに勝ちたいの！」

気合い入りまくりの巴

「越前に？」

…何があっただ

優一が問う

「実は昨日、校内ランキング戦の後に、リョーマくんと喧嘩になって、家のコートで試合をしたんだけど…」

「惜敗したって訳か」

「…その通りです」

優一の指摘にうつ向き頷く巴

「基本段階の巴じゃ、越前相手には勝目が無かっただろ？」

「そうだよ、なのにリョーマくんってば、容赦無くツイストサーブは打ってくるし！」

思い出ただけで怒りに震える巴

「それで喧嘩の原因は何だ？」

「楽しみにしてた虎屋の栗羊羹をリョーマくんが私の分まで食べたの！」

酷いと思うでしょ……！」

食べ物への恨みを思い出しいライラしてる巴

「……………」

【バタン】

無言で玄関のドアを締める優一

【ピンポン・ピンポン・ピンポン・ピンポン・ピンポン…】

再び連打される呼び鈴

【ガチャ】

「巴、近所迷惑だぞ」

「だったら人を無視してドアを締めないでよ！」

優一の行為に怒る巴

「コーチなら俺より月姉かひかり、琥珀に頼んだ方が良いぞ」

《かったるいし、巴のコーチを引き受けたら色んな意味で後々大変
そうだし》

優一がやんわりと断ろうとする

「他の人に頼めないからわざわざ優一に頼んでるんじゃない！」

…それにその格好はどこかにテニスをやりに行くんでしょ？」

服装を指摘する巴

「確かに軽く打ちに行こうとは思ったから準備はしてたけどさ」

認めるジャージ姿の優一

「だったら、ついでにコート！」

「断る、俺にメリット無いもん」

巴のコーチをあっさり断る優一

「お願い・お願い・お願い・お願い・お願い・お願い・お願い・お願い・お願い・お願い・お願い・お願い……」

拝み倒す巴

「だあ、分かった

今日1日だけだからな！」

根負けしてコーチを引き受ける優一だった

「しよぼおくん

うつ向いた私服の菊丸英二が不二周助と一緒に商店街を歩いている

…日曜の日中、商店街は活気があり賑わいを見せていた

「そんなにガツカリする事は無いんじゃない英二

監督と部長推薦でレギュラーの座は守れたんだし」

慰める様に語る不二

「分かってるけどさあ、桜内戦でスタミナ切れで最後の桃戦では全く良いところ無しで負けたんだぞ」

しょんぼりしてる菊丸

：優一に負けた後、最終の試合で体力が切れた菊丸はアクロバテックプレーが殆ど出来ず、桃城に負けてレギュラーの座を失いかけた
しかし監督&部長推薦で辛うじてレギュラーの座を得る事が出来た
のだった

「乾だつて越前と海堂に負けて英一と同じ監督と部長推薦でレギュラーを守ったんだ」

「分かってるけどさあ」

不二の励ましにも何と無く納得いかない菊丸

「仕方無い、だったら気分転換に翠屋でも行くかい？」

…丁度、白河さんとひかりちゃんが店の手伝いでいるって言ったし」

「マジ、行く行く！」

不二の提案にあつという間に機嫌を直す菊丸

【カランカラン…】

「いらっしゃいませえ」

数分後、喫茶店 翠屋の扉を開けて入った不二と菊丸はメイド服の様なユニフォームを着た女の子店員の声で迎ええられる

「いらっしゃいませ…って、あれ不二先輩と英二先輩？」

2人の後輩で翠屋のユニフォームであるメイド服ばい姿の白河月音が現れる

「やあ〜 白河さん」

「はろはろツキリン、お帰りなさいませ、御主人様」は？」

挨拶ついでに容姿を褒める不二とメイド的振る舞いを期待する菊丸

「ありません」

…英二先輩、いつも言ってますけど、うちはメイド喫茶じゃなく、普通の洋菓子屋兼喫茶店です」

呆れて答える月音

「でもさあ〜ツキリンのその姿を見ると、メイドさんにしか見えな
いんだよねえ〜」

「このウエイトレスの制服は母さんの趣味だから実家の店を手伝う上で、仕方無く着てるだけです」

英二の意見を否定する月音

「妹のひかりちゃんは今、店に居ないのかい？」

「居ます、あっちのカウンター席でお客様と話してます」

不二の質問に月音が答える

「ん？」

あれって！」

菊丸が長い髪をポニーテールにしたひかりと仲良さそうに話してる
長身の人物に気づく

「ちよつと意外な人物だね」

不二も気づき眩く

「氷帝2年の鳳くん、男の子がちよつと苦手なひかりが優以外で仲良くしてる男子のお客さんなんですよ

…何か話が合うみたいです」

楽しそうに話をしてるひかりと鳳を見て月音が相手の説明をする

「何だか仲良さ気じゃん」

何となく面白く無い英二

「氷帝学園2年テニス部レギュラー、鳳長太郎。

2月14日生まれ、血液型O型

利き腕は右でプレイスタイルはサーブ&ボレー

得意技は時速200Kmに迫る超高速サーブで通称スカッドサーブ

趣味はピアノ・ヴァイオリン、好きな食べ物はビーフカツセロール・ししゃもの本物」

菊丸の後ろに立ってる長身のメガネ男が呟く

「?げっ、乾!?!」

驚き飛び退いた菊丸が目にした正体は乾であった

「…乾、いつの間にか?」

「この店がオープンしてから来ている

この店は珈琲のお代わり自由な上、データを纏めるには最適な場所だ。」

不二の質問にメガネを弄りながら答える乾

「珈琲一杯で何時間も粘られるのは迷惑だけど、母さんが青学テニス部の人だからOKって許しちゃったから仕方無いんですけどね」

迷惑そうな顔をする月音

「いぬう〜い、俺のツキリンに迷惑かけるなよ〜！」

「ふん、残念ながら菊丸、俺の計算では白河姉が菊丸と付き合う確率は…」

菊丸と乾が言い争う

【ガシッ】

「英二・乾、これ以上は白河さんやこの店に迷惑をかけるから止めるよね？」

黒いオーラを放ちながら両者の肩に手を置く不二

「いつ、乾

この話はまた後日って事で…」

「うっ、有無

そうしよう」

不二のオーラに圧され菊丸と乾は言い争いをピタリと中断する

「…それじゃあ、お席にご案内します

乾先輩の席は4人かけなので相席で構いませんか？」

「うん、僕達は構わないよ」

月音の提案に不二が答える

「では、こちらへどうぞ」

月音に案内されて席に向かう不二・菊丸と一緒に席に戻る乾だった

…数十分後

【パクッ】

「モグモグ…でもさあ〜乾、何で此処でデータ整理なんかしてんだよ?」

菊丸が目の前にある注文したプリンアラモードスペシャルをスプーンですくい口の中に納めてから尋ねる

「白河の母親が経営してるこの翠屋には色々な学校の生徒達が着ているからな」

情報収集も出来る中々良い場所だからな」

目の前のデータノートを見ながら答える乾

「例えば、何処だい?」

不二が尋ねる

「テニス部のみなら氷帝は鳳だけで無く、部長の跡部景吾・樺地崇弘・忍足侑士・向日岳人・宍戸亮・芥川滋郎と殆どのレギュラーが来ている」

山吹中の千石清純も此処に良く来ている」

《千石の目的は白河姉妹なのは黙っておくか》

答える乾

「うちも琥珀を筆頭に手塚部長・大石副部長・河村先輩・桃ちゃん先輩・海堂先輩ですね」

最近はおちゃんや那美ちゃんも良く来ます

…特に河村先輩は親子で良く入らしてますよ

後は不二先輩の弟の裕太さん」

3人の席の前にコーヒーポットとカゴを持ったひかりが現れる

「おっ、ヒカリン」

「へっ、ヒカリン？」

菊丸の呼び方に不思議そうな表情をするひかり

「ツキリンの妹で名前がひかりだからアダ名はヒカリン」

菊丸が解説する

「はあ〜？」

納得いって無いひかり

「んっで、もって俺の事は英二先輩って呼ぶんだぞお〜」

「ああ〜 はい、分かりました」

菊丸が親しみを込めてアダ名と名前で呼びあいたいという意味に気づいたひかりが頷くと

「珈琲のお代わりは如何ですか？」

すぐにお仕事モードに移行する

「貰おう」

「畏まりました」

乾のティーカップにボトルから注ぐひかり

「話は戻るけど、やっぱり他校の生徒も良く来るのかい？」

「はい、そうですね」

アップルパイを食べる手を止めた不二の問いに頷くひかり

「この店の老若男女の男女比は4：6、女性は洋菓子目的でその味の旨さにリピーター率が高い」

男性の目的はこの店のウエイトレスで美人が多く、特に店の看板娘の白河姉妹が目的の中高生が多い」

乾が分析結果を告げる

「乾先輩、1つ間違いです」

モテるのはお姉ちゃんだけで私は全然ですよ」

自分がモテる事は否定するひかり

「ひかり、バイトさん達が着たからそろそろ上がった

優とお昼食べたら午後からは一緒にテニススクールに行く予定なんでしょ？」

月音が不二達と話てるひかりを呼びに来る

「えっ、もうそんな時間？」

ひかりが店内にある掛け時計で時間を確認する

「早くしないと優がお腹空かせてるんじゃない？」

「うわあ、忙しいと！」

不二先輩・英二先輩・乾先輩、失礼します」

3人に頭を下げると慌てて店から出て行くこととするひかり

「ひかり、ちょい待ち！」

…アンタ、その格好で商店街抜けて家まで帰るつもり？」

月音が呆れた表情で止める

「あつ…きつ、着替えてきます…//」

自分が店のユニフォーム姿だった事を思い出して顔を真っ赤にした
ひかりは慌ててバックルームにある更衣室へ飛び込む

「はあく、全く、あの娘ってば大事な事以外になると天然ドジっ娘な
ところがあるだから…」

溜め息を吐く月音

「はろはろ、ヒカリンはドジっ娘属性があるんだあく」

「可愛いところがあるじゃないひかりちゃん」

ひかりの意外な一面を知った菊丸と不二が言う

「白河ひかり、ドジっ娘萌え属性追加っ…」

誰も気づかないくらい小さな声で呟き、密かにデータを書き足す
だった

第8話 休日(1) (後書き)

この話は面白かったでしょうか？

キャラ崩壊してる気もしないでは無いです(笑)

読者様受けが良かったら、次も休日編の続きを執筆しようかと考えていますので感想を頂けると有難いです

それではまた！

第9話 休日(2) (前書き)

お久し振りの更新でございます

お気に入り登録が何と100件を突破しました(;)!!

まさか、こんなに早く100人以上の方がお気に入り登録して下さると思つてませんでした

登録してくださった読者様の方々、ありがとうございました(;)

――

それでは第9話どうぞ!

第9話 休日(2)

「行くぞ！」

「はあ・はあ・はあ…くっ！」

優一が放ったジャンピングスマッシュに必死に追い掛ける巴だったが追いつけずポイントを決められる

…巴に粘られて仕方無くテニスのコートを引き受ける事になった優一

午後からひかりと一緒に来るはずだったテニススクールに先に来て借りたコートで軽く1セットマッチを数試合していた

「だあゝ ハンディ付きなのにまた負けたあー!？」

コートに座り込み、悔しそうな表情をする巴

「ふうゝ、ハンディ付きの俺を相手にこれだけ動ければ凄いつて」

《身体能力の高さは同い年の男子より遙かに上だし、巴は試合する度に急激に上手してるから間違い無く実戦で急成長するタイプだ》

巴の成長に感心する優一

…なお、ハンディとして優一は右手を使わない事、必殺技無しとパワーリスト・パワーアングルに加えてパワーベルトを装置して合計30Kgの重りを装備していた

なお、巴には1/3の重さしか教えて無い

「はあ〜 この調子じゃ、リョーマくんには勝てるのは当然先だなあ」

溜め息をする吐く巴

「そつでも無いと思っよ

気がついてるか、自分の特長」

「へっ?」

不思議そうな表情をする巴

「お前は目が良いんだよ

技術がまだ未熟だから100%じゃ無いが、ところどころにテニス部の皆の良い動きを真似て自分のものにしてしまっている」

「嘘！」

叫ぶ巴

「本当だよ、外から見てたら追いつけ無かったけど最後の動きはお姉ちゃんみたいだったよ」

そこに現れたのは少女

「ひかりちゃん！」

そう少女はひかりである

「おう、店の手伝いは大丈夫だったのか？」

「うん」

「優くんからメールを貰って急いで着たんだ」

「それは良かった」

「それでひかり先生から見た巴のテニススタイルと評価は？」

「優くんと同じオールラウンダータイプだね」

「基本がまだただけど、基本をマスターして成長したら同世代の女子選手としては怖い存在になりそうだね」

「ひかりの評価に」

「ウソウソ、私の事を過剰評価しすぎだよー！」

巴は謙遜するが

「俺の評価もひかりとほぼ一緒だ

後は巴がテニスにどれだけ真剣に打ち込めるか次第だが、頑張り続ければ越前を越えるのも不可能じゃないと思うぞ」

「私がリョーマくんを越える」

信じられないとばかりに呟く巴

「…成る程、面倒臭がりの優くんが私を待たずに巴ちゃんとは二人きりでテニスをしてた理由はこういう事だったんだ」

優一の隣に来ると皮肉たっぷりに嫌味を言うひかり

「最初は巴に無理矢理テニスのコーチを頼まれたが、実戦形式で教えてたら凄い勢いで吸収して上達していくからアイツ、面白いんだよ」

妬気持ちにも全く気づかず笑みを浮かべる優一

「ふん、それは良かったですねえー！」

「痛っ、何するんだひかり！」

左の二の腕をツネられて痛がる優一

「ふんだ！」

頬を膨らませてるひかり

「待たずに置いてったのを怒ってるのか？」

「違いますよぉ〜だぁ〜！」

ますます「ご機嫌斜めになる美少女

「練習終わったら後でクレープでも奢るから機嫌直せよ」

「…今の話、本当？」

横目で優一を見るひかり

「嘘は言わない、約束は護る」

「せえ〜つたいに約束だからね」

「はいはい」

嬉しそうな表情のひかりを前に頷く優一

「……………」

《琥珀ちゃんもそうだけど、ひかりちゃんって優一の前だといつもの人前とは違う、素直な女の子らしい部分が出るんだね

お互いの事を良く分かってるって幼馴染みって関係が私には羨ましいかも…》

そんな2人を黙って見て羨ましく思う巴だった

【ガラガラ…】

「…しゃい…」

とある寿司屋で元気に挨拶するのは店主

…此処は青春学園3年生、テニス部レギュラーの河村隆の父親がやっている河村寿司である

「こんにちは」

暖簾を掻き分けて入って着たのは私服姿の白河月音である

…お昼ピークも終わった事もあり、この時間は店内にお客は居ない

「白河じゃないか、どうしたんだよ！」

店を手伝い、テーブルを拭いていた河村が驚く

「どうしたって、配達です」

手にしてるケーキの入った箱を河村に見せる

「おう、それを待つてたんだ！」

河村の父親が月音からケーキの箱を受け取る

「父ちゃん、また翠屋にケーキを頼んだの？」

「母さん達が食べたいというもんだから頼んだんだ」

代金を払いながら答える河村父

「毎度、ありがとうございます」

受け取った代金を鞆に仕舞う月音

「配達して貰って悪いな白河」

「いえいえ、これもお手伝いの一貫ですから」

笑みを魅せる月音

「そつだ、月音ちゃん

時間はまだあるかい？」

「はい、此処の配達で私の店の手伝いは終わりだから時間はありますけど」

河村父の質問に答える月音

「だったら寿司を喰っていかないかい？」

丁度、良いネタが入ってるんだ！」

「…お気持ちは嬉しいですが、ご迷惑じゃ」

遠慮する月音

「なあ〜にい、テニス部で隆が世話になってるし、それに…」

ニヤニヤしながら息子を見る父

「何だよ、父ちゃん？」

不思議そうな表情をする河村

「隆の未来の嫁さん候補筆頭の月音ちゃんには何だってサービスするよ」

いつでも嫁にできてくれて良いからな」

「?とっ、父ちゃん…//」

父親の一言で耳まで真っ赤になる河村

「あははは…そうですね、考えておきますね」

冗談だと思い、笑って答える月音

「よっしや

ケーキを置いてきたら、すぐに握るからちょっと待ってな」

一度、店の奥にある自宅に向かう河村父

「ごめんな白河、父ちゃんが変な事を言って…」

「毎回言われる事ですし、ちゃんと冗談だって分かっていますよ

…それに美味しいお寿司をご馳走して貰えるんですからタカさんは

気にしないで大丈夫ですよ」

お茶の入った湯飲みを渡しながら謝る河村にカウンター席に座り笑みを魅せる月音

「……………」

「…そうか」

《うちの学校で人気のある白河と付き合えたら最高だけど、ライブル多いし、しかも今の白河には俺と付き合う気は無いみたいだ

…ちょっとくらいはその気になって欲しいな》

内心、複雑な思いを抱く河村であった

数時間後、夜

場所は変わり、凜々しいタキシード姿の男性や華やかなドレスを着飾った女性達が集まってるパーティー会場

「……………」

《早く終わらないかなあ》

超高級ホテルの大広間で行われているパーティー会場の窓際にドレス姿でつまらなそうにしているのは琥珀である

…有栖川コーポレーションと関係のある企業が開催したパーティーに招待された為、両親と兄弟と一緒に参加した琥珀だが、元々この手のパーティーが好きでは無いので一通り挨拶を終えると窓際に来て外を眺めていた

「おいおい、AK「有栖川コーポレーション」のお嬢様がこんな所で何を壁の華になってやがる」

白一色のタキシード姿で現れた大人びた少年

…どうやらこの少年もパーティーに招待されたらしい

「跡部財閥の後継者さん、何か御用ですか？」

冷やかな目で回答する琥珀

…目の前にいるのは氷帝学園テニス部部長の跡部景吾である

「いや、暇そうにしてたから声をかけてやっただけだ」

「それはどうもご丁寧」

「どうせお前もこの退屈なパーティーに暇を持て余してるんだろ、
あぁ〜ん？」

「…否定はしませんよ」

的確な事を言う跡部に素っ気なく答える琥珀

「そついやお前や白河姉妹は何で氷帝に来なかつたんだ？」

うちの学校のスカウトが誘ったが断つたそつじゃないか、あん？」

「ひかりや月音先輩は分かりませんが、私の理由は至ってシンプルです」

貴方と同じ学校でテニスをしたくなかつただけです」

「ほお、何故だ？」

全国制覇するなら俺様の氷帝テニス部に入るのが一番の近道だろうが」

「アナタのそついうところが嫌いなんです」

…もつとも元々テニスをするのはスクールのみにする予定でしたが、今年からミクスドが加わってくれたお陰で今はテニス部に入った事には感謝しています」

何かと比べられる有栖川コーポレーションと跡部財閥に嫌気がさし

てた琥珀が嬉しそうに言う

「どつという意味だ？」

「ミクスド限定とはいえ、アナタが率いる氷帝テニス部を堂々と真
つ正面から倒す事が出来るですからね！」

わざと笑みを魅せると琥珀はその場を後にする

「くっくくく…この俺が、まさか宣戦布告されるとはな」

琥珀の後ろ姿を見ながら笑う跡部だった

第9話 休日(2) (後書き)

休日パートは如何だったでしょうか？

次回からは本編ストーリーに戻りたいと思います

ヘタレ作者は私生活が忙しいので超亀更新になってしまい申し訳ありませんがそれでもこの小説を見捨て無いでいてくれると有難いです

それでは！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5263x/>

テニスの王子様 -Nobody beats me tennis-

2011年11月13日14時23分発行